

お客さんと接することによって、大きなやりがいを感じています。



農業に懸ける情熱



1 就農したきっかけ

両親が農業を営んでいたこともあり、幼い頃から農業を身近に感じて育ちました。そうした環境の中で、「将来は実家の農業に携わりたい」という思いが自然と芽生えました。しかし、すぐに就農するのではなく、社会で幅広い経験を積むことも重要だと考え、高校卒業後は江別市の大学に進学し、社会経験に向けた学びを深め、卒業後は一度就職しました。

その間、実家では兄が父から経営を引き継ぎ、両親と兄夫婦の4人で営農を続けていました。しかし、時代の流れによって経営規模が拡大する中で、労働力を多く必要とする三笠メロンの栽培面積は減少し、代わりに機械化が進めやすい水稲への転換が進んでいました。幼い頃から身近に見てきた三笠メロンが少しずつ姿を消していく現状に、私は強い危機感を覚えるようになり、そこから「三笠メロンを少しでも残していきたい」という思いが次第に大きくなったことをきっかけに、34歳のとき、約10年間の社会経験を経て農業に従事することを決意しました。

実家の農業を支えるだけでなく、「三笠メロン」という地域の誇りを未来に残したい」という強い思いがあったからこそ、農業に携わるという選択が自分の中で揺るぎないものになったのだと感じています。

2 就農当時のこと



実際の農作業に携わってみると思い通りにいかないことや体力を要する作業が多く、その難しさを改めて痛感しました。両親や近隣の農家の方々から暑さに耐えながらハウスの中で作業を続ける姿や、徹底した管理作業で雑草が少ない畑を維持している姿を目にした時、農家としての覚悟と努力に深い尊敬の念を抱きました。

また、トラクターの作業機の脱着や、軽微な機械の修理など、自分で対応しなければならぬ場面ではわからないことも多く、戸惑うことも少なくありませんでした。そんな時は父や兄から助言をもらいながら一つひとつ経験を重ねることで、徐々に作業のコツを掴み、農業に慣れていきました。

3 仕事をするうえで大切にしていること

農作物は必ず現場で、自分の足で歩いて観察することを大切にしています。なるべく機械に頼らず、小さな変化にもすぐに気づけるようにすることで丁寧な管理ができると考えています。

また、出荷して終わりではなく、その先にいる「食べてくれる人」のことを常に意識しています。おいしさはもちろんのこと、安全・安心な農作物を届けるために、日々の管理作業を丁寧に積み重ねています。

4 目指す農家像

自分が生産している農産物を購入してくれるお客さんとのつながりを、これからもっと深めていきたいと考えています。最近では直売所やオンラインショップを通じて遠方から購入してくれるお客さんも増えました。購入してくれた方全員にお礼を伝えたい」という思いから、商品を送送する際には必ず手紙を添えるようにしています。こうしてお客さんとの交流が生まれたときには、「来年はこうしてみよう」と新しいアイデアが浮かぶこともあり、強いやりがいを感じています。

今後も周りの人とのつながりを大切にしながら、近隣の農家の方々からも信頼していただけるような農家を目指して、日々の営農に励んでいきます。



人物 memo

三笠市大里

とこおか

床岡

ゆうた

裕太

さん(40歳)

妻のまどかさん、父の徳行さん、母の真理子さん、兄の達也さん、兄の妻である奈緒さんの家族6人で約28haの農地に水稲やメロン、カボチャを栽培。大学卒業後は社会経験を積むため一度就職しましたが、メロンの栽培面積が減少する中で「三笠メロンを残したい」という思いが芽生えたことをきっかけに、34歳で農業の道に進みました。

現在は農産物を購入してくれるお客さんとの交流にやりがいを感じながら、充実した農業生活を送っています。